

幕屋(栄光と美を表す聖なる装束Ⅲ)

前回までは、装束の中のエポデと胸当てを見てきた。続きを見ていこう。

エポデの下に着る青服

「エポデの下に着る青服を、青色の撚り糸だけで作る。その真中に頭を通す口を作る。その口の周囲には、織物の縁をつけ、よろいのえりのようにし、ほころびないようにしなければならない。そのすそに、青色、紫色、緋色の撚り糸で、ざくろを作り、そのすその回りにこれをつけ、その回りのざくろの間に金の鈴をつける。すなわち、青服のすその回りに金の鈴、ざくろ、金の鈴、ざくろ、となるようにする。アロンはこれを務めを行なうために着る。彼が聖所にはいり、主の前に出るとき、またそこを去るとき、その音が聞こえるようにする。彼が死なないためである。」(出エジプト 28:31-35, 39:22-24)

大祭司が、華やかなエポデの下に着るのは、青一色の服だった。青は天に属する性質を表す色である。エポデの下に隠されている天来の性質。この服は、一枚の縫い目のない布で作られ、そでのない、よろいのように首だけくり抜いたものであったようだ。このように、頭を入れる口が中央に作られ、布が裂けたりほころびないように縁がつけられた。

すそには、青色、紫色、緋色の撚り糸で作られたざくろがつけられ、また金の鈴もつけられた。ざくろと鈴は交互につけられた。ざくろの青は天の色、紫は高貴な王の色、緋は罪とされ十字架にかかられた燃えるような強い王の色を表す。キリストの公私の生涯の栄光を表す。ざくろは、中においしい種がたくさんつまった甘くてさわやかな果実である。ざくろは実を結ぶことを示している。そして、その中にたくさんつまっている種は、御霊の実である。御霊の実を豊かに結んだ信者の実である。また、鈴は証しを示している。金は神の義の栄光を表す。ここで、注目したいのが、ざくろと鈴の順序である。作るときは、ざくろが最初、次に鈴が述べられた。できた結果は、金の鈴、ざくろ、金の鈴、ざくろ、と鈴が最初に述べられている。なんとなくか、偶然ではない。主イエスは神に対して実を結ぶことによって、神に対する証しの生涯を全うされた。実と証しのバランス、歩みと証しの一致、調和が大切である。鈴ばかり多いと、やかましいドラやうるさいシンバルになってしまう。私たち、イエスを信じる者も、生活の中でまず実を結ばなければならず、その結果として真実の証しの生活ができるということである。結果として、イエスは、天に昇られ、贖いがなされたというよい知らせ(証し、鈴)が鳴り響いた。その贖いは神のみこころを完全に満たし、後に聖霊が降り、豊かな実を結んだ。同じように、私たちも、バランスのとれた成長した信仰の結果として、証しの生活がなり、神の国に魂を勝ち取るという豊かな実を結ぶ者となるのである。これらのざくろと鈴は、一番低いすそ回りにつけられたのである。証しするにしても、実を結ぶにしても、けんそんが大事である。

アロンはこれを務めを行なうために着た。そして、死ぬことのないように、聖所では、鈴をならし続けた。証しは私たちのいのちにとって欠かせないものである。鈴がならない状態は、もはや死んでいることであった。

かぶり物につけられた純金の板

「また、純金の札を作り、その上に印を彫るように、『主への聖なるもの』と彫り、これを青ひもにつけ、それをかぶり物につける。それはかぶり物の前面に来るようにしなければならない。これがアロンの額の上にあるなら、アロンは、イスラ

エル人の聖別する聖なる物、すなわち、彼らのすべての聖なるささげ物に関しての咎を負う。これは、それらの物が主の前に受け入れられるために、絶えずアロンの額の上になければならない。」(出エジプト 28:36-38, 39:30,31)

大祭司の頭のかぶり物の前面には、『主への聖なるもの』と彫った純金の札を青ひもでつけられた。神にささげるすべての物は、全き聖なるものでなければならない。しかし、私たちのささげる物は、どんなに注意を払っても、不完全で不足していることが多い。ささげ物が神に受け入れられるものとなるためには、神の義で覆われることが必要である。この神の義によって、ささげ物は受け入れられる聖なるものとなるのである。神の義を象徴する純金で作られた板、イエスを信じることによって「聖なるもの」と見なされるイエスの血潮による義の型である。絶えずイエスを仰ぎ見て、神のみ前に出ようではないか。

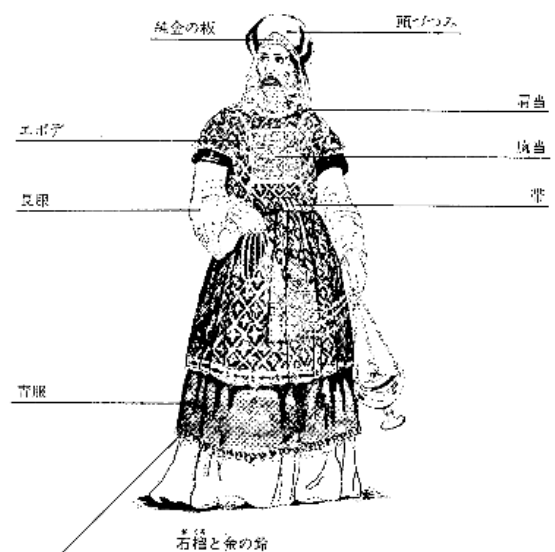
市松模様の長服、かぶり物、飾り帯

「亜麻布で市松模様の長服を作り、亜麻布でかぶり物を作る。飾り帯は刺繍して作らなければならない。」(出エジプト 28:39, 39:27,28)

大祭司の一番下に着る衣服、直接皮膚の上に着る衣服は、織った白い亜麻布で作られた長服であった。裸と肉が完全におおわれるように、足元まで届く長服に仕立てられた。まっ白な亜麻布は、キリストの聖さと義の象徴である。この長服は、織工によって、白一色の糸が格子状に織られたものであった。白糸で縦横互い違いに、きれいに織り出され作られた。私たちも、キリストの聖さと義によって、きれいに織り合わされ、一つとされるのである。「私たちはみな、汚れた者ようになり、私たちの義はみな、不潔な着物のようです。私たちはみな、木の葉のように枯れ、私たちの咎は風のように私たちを吹き上げます。」(イザヤ 64:6) 私たちの不潔な肉の義は、神の義で覆われる必要がある。

「タルムード」によると、大祭司は、長さ16キュビト(1キュビトは約44cm、16キュビトは、約7m4cm)の亜麻布で、ターバンのように頭を巻いた。頭を覆うことは、服従を意味する。このように、大祭司は、からだ、頭を亜麻布に包んだのである。

飾り帯については、エポデの項目でふれたとおりである。「帯」は大祭司のエポデと関連のあるときのみに使われていることばであり、「工夫したわざ」を意味している。帯は奉仕を象徴している。美しい飾り帯に見られる仕える姿で、主イエスは人に接された。



アロンの子らのための服

「あなたはアロンの子らのために長服を作り、また彼らのために飾り帯を作り、彼らのために、栄光と美を表わすターバンを作らなければならない。これらをあなたの兄弟アロン、および彼とともにいるその子らに着せ、彼らに油をそそぎ、彼らを祭司職に任命し、彼らを聖別して祭司としてわたしに仕えさせよ。彼らのために、裸をおおう亜麻布のももひきを作れ。腰からももにまで届くようにしなければならない。アロンとその子らは、会見の天幕にはいるとき、あるいは聖所で務めを行なうために祭壇に近づくとき、これを着る。彼らが咎を負って、死ぬことのないためである。これは、彼と彼の後の子孫とのための永遠のおきてである。」(出エジプト 28:40-43, 39:27,28)

アロンの子らの装束は、亜麻布の長服、飾り帯、ターバン(かぶり物)、亜麻布のももひきであった。これらの衣服は、アロンの子らのみならず、アロンにも着せられた。アロンは、この点に関しては、キリストの型ではなかった。アロンとその子らは、裸(罪)を義(亜麻布)でおおわれる必要があった。おおわれないまま、神に近づき、咎を負って死ぬことのないためであった。このことは、永遠のおきてと書かれている。